

II. 特集! 一橋大学にとっての教養教育

1. 教養ってなんだろう? 加藤 哲郎 (社会学研究科)



学生向けに草稿を書いたところで、創刊号をもらった。『アゴラ』というこの広場は、誰のためのものだろう? 創刊号を見る限り、どうも「関係者」教員の経験交流の場のような。でも「教養」ってなんだろう?

私はシステムよりも、学生の「学び」の姿勢と、それをひきだす教員の問題だと考えている。「教養課程」は、学生の「学び」の意欲がなければ始まらない。だから、あくまで学生向けに書く。

インターネットの定番サーチ・エンジン「ヤフー・ジャパン」に「教養」と打ち込むと、百件あまりの登録サイトが出てくる。その大部分は、大学の「教養部・教養学部」と、各種学校の「文化、教養」講座である。なぜ「文化」と「教養」はワンセットなのか?

和英辞典をひくと、「教養」でも「文化」でも culture とでてくる。「教養」と「文化」はどう違うかと、『広辞苑』を見ると、「きょう - よう【教養】 1. 教え育てること。2. (cultureイギリス・フランス・Bildungドイツ) 単なる学殖・多識とは異なり、一定の文化理想を体得し、それによって個人が身につけた創造的な理解力や知識。その内容は時代や民族の文化理念の変遷に応じて異なる」とあり、「ぶん - か【文化】 1. 文徳で民を教化すること。2. 世の中が開けて生活が便利になること。文明開化。3. (culture) 人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含む。文明とほぼ同義に用いられることが多いが、西洋では人間の精神的な生活にかかわるものを文化と呼び、技術的発展のニュアンスが強い文明と区別する」と出てくる。

どうやらヨーロッパ語の culture 自体に内在するニュアンスが、日本語の「教養」と「文化」に分かれたみたいだと見当をつけて、今度は英和辞典で culture をひくと、例えば『ライトハウス英和辞典』(研究社)には、親切なことに、「元来は『耕地』の意」として「agriculture=農業」の参照を求められ、「培い耕すこと」から直接に「(生物・植物を)栽培・培養」する方向へ、比喩的用法で「個人の品性を培うこと、修養、教養」と、その所産である「社会で培われた考え方、文化」に分化していくことが、きれいに図示されている。そういわれてみると、辞書の culture の近辺には、cultivation (耕作・修練) があり、cultured pearl は養殖真珠だと気づ

く。念のために、*The Concise Oxford Dictionary* で culture を見ると、「1. tillage of the soil; rearing, 2. improvement by (mental or physical) training; intellectual development; particular form, stage or type of intellectual development or civilization」とあり、「栽培→教養→文化」と、人間は自然に働きかけ、知的トレーニングを重ねて文化・文明を築いてきた、教養は文化の主體的側面なんだ、と教えられる。

だが、「教養」は奥深い。日本語の「教養」は本当に culture の翻訳語なのか? 中国の大学に漢字の「教養課程」はあるのか? アメリカではなぜ liberal arts なのか? 『日本国語大辞典』(小学館)には古代からの用例がある。「孝養」の意では東寺文書からあるらしいが、「教え育てる」は『西国立志伝』、「文化に関する広い知識」は長与善郎が挙げられているから、現在の意味は西欧語の翻訳のようだ。そこで三省堂『一語の辞典』シリーズで「文化」を手にとる。すると日本思想史の文脈では英語の culture よりドイツ語の Kultur のニュアンスが優勢で、1946年の昭和天皇人間宣言にも「教養豊カニ文化ヲ築キ」と出てくる、と知らされる。そこから日本国憲法第25条「健康で文化的な生活」の生存権には「教養を得る権利」が入るのか、などと考えると、「教養」も面白くなる。生存権は、世界憲法史上ではドイツのワイマール憲法「人間たるに値する生活」に発する。しかしGHQ憲法草案にはなく、日本国憲法を制定した国会で社会党の提案で入ったらしい、とわかってくる。日本の大学が敗戦後に「文化国家」をめざし「教養課程」を設けた意味が、伝わってくる。その息吹きを追体験しようと、福澤諭吉らの明治期「文明」思想・「和魂洋才」に対抗して生まれた大正「教養主義」を、阿部次郎や和辻哲郎で味わうのもいいし、ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』で「戦後民主主義」に進むのも悪くない。

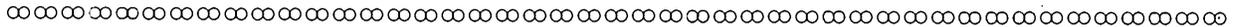
どうやら「教養」は、そんなに難しくはなさそうだ。教科書でも教師の言葉でも、文学でもコミックでもいいから、いままで「自然」で当たり前だと思ってきた「何か」に疑問を持ち、辞書やインターネットで調べ、自分のアタマで考えることらしい。クイズに強いのも「教養」の一部だが、奥行きはもっと深そうだ。しかしなぜ「教養」の次が「専門」なのか、などと考え始めたら、いっばしの「教養人」の卵である。それではクイズ的に「教養」を深めよう。第一問。「文明」と city の関係は? 第二問。liberal arts にはなぜ「リベラル」の形容詞がついているのか?

この「なぜ」なしには、「教養」は始まらない。

Agora

No. 2

2001. 10. 1. 発行 一橋大学大学教育研究機構



I. 活発な教養教育論議を

大学教育研究機構長 藤田 和也



本学における今後の教養教育はどうあるべきか？

この問いが極めて緊要な課題になっていることはどなたも認めるところであろう。ことさら私には、現在の置かれた立場もあって、この問いが相当な重みと切実さをもって、ヒタヒタと迫って来ていることを実感している。おそらくこの1、2年のうちに、この問いに収斂するであろういくつかの問題に対処しなければならなくなるだろうと考えている。

それにしても、本学ではこの問いをめぐる議論の蓄積は必ずしも十分ではない。過日、大学評価・学位授与機構からの要請があって、本学の教養教育の歴史と現状についての報告書を取りまとめた機会に、第二次大戦後の本学における一般教育改革の歩みを少しばかり紐解く機会を得たが、戦後の改革期を除いて、教養教育のあり方をめぐる議論がその後十分になされてきたとは言い難い。数年前の4年一貫教育への移行前後も、教養教育のあり方や考え方についての根本的な議論はなされなかった（その議論に拘泥していると具体的な改革が進まなかったであ

うからやむを得ない面はあるが）。

こうした経緯と現状から、今こそ、本学における教養教育論議を活発に行う必要があると強く感じるのである。この特集がその学内論議の呼び水になればと念じている。その議論の呼び水の足しになればと、少しばかりの私見を提示してみたい。

一つは、本学が実学の教育を大事にするいっぽうで、全人的な教育を重んじる教育伝統を持っているところに一橋大学らしさがあること。

二つには、「教養」をたんなる「知の内面化」と狭くとらえず、知と技に加えて人間性の涵養をも含んだ全人的な形成ととらえるべきこと。そのためのカリキュラムには、全体性と調和性が求められること。

三つには、主として社会科学を専門領域とする本学の学生にとって、社会科学以外の教育分野の存在意味は「異化」と「架橋」の両効果にあること。

四つには、カリキュラム全体は、「教養教育」と「学部教育」に加えて、両者の共通の基礎となる教育領域（リテラシー教育や基礎的スキル教育）を設けてもよいこと。

皆さんはいかがお考えでしょうか。

目次

I. 活発な教養教育論議を	藤田和也 機構長	1
II. 特集！ 一橋大学にとっての教養教育		2
1. 教養ってなんだろう？	加藤哲郎	2
2. 学生は変わったか？	松永正義	3
3. 「役に立つ」ことの意味	山崎秀記	4
4. 開かれた教養教育カリキュラムを	加藤 博	5
5. 教養教育と専門教育	盛 誠吾	6
III. 大学教育研究機構で 「学生による授業評価」の試行		
	藤田和也 機構長	7

・訪問！機構関係の教材準備室等の紹介 第2回	
語学教育準備室	8
数学統計学教材準備室	8
・平成13年度大学教育研究機構年次報告	8
2001年4月1日～9月30日	

Agora

古代ギリシャの都市国家において市民生活の中心をなした広場。市民たちは好んでここに集まり、政治を談じ、交友を楽しんだ。また市場としての役割も果たした。

(講談社「大事典 desk」より)